

## 質問紙調査の分析に見る子どもの歌唱行動

羽根田 真 弓

Mayumi HANEDA : Survey Analysis of Children's Behaviour Towards Music

The purpose of this study was to define which kinds of songs children prefer to sing today. I made a thorough investigation of 137 children, aged 3-6 years old. Children from the age of 4 years old prefer animation songs. According to this result, I expect it is due to the development of the words and experience of music. Children aged 5-6 years old tend to prefer Japanese popular songs.

Key words : Music Environment, Animation Songs

### 1. 問題設定

時代の激しい変化およびその背景において、子どもの歌の嗜好はどのように変化しているのか。多種多様な音楽が溢れている状況のなかで、子どもたちの歌の嗜好も変化してきているものと考えられる。

なぜなら、歌謡曲はもちろん、Jポップスにはとりわけ顕著な変化が見られるからである。村尾の分析<sup>1)</sup>によれば、1990年代よりわが国のポピュラーソングのリズムには文節と拍節が不一致となる詰め込み型と弱化モーラのシラブルによる配字シンコペーションが起こり、従来の音楽的スキーマに反するリズムパターンが生まれている。これらのリズムパターンによるJポップスはすでに若い世代に浸透しており、さらに、マスコミ音楽も氾濫を増している。

したがって、子どもたちの音楽体験は多様化せざるを得ない現状になっていることは明らかである。そこで、子どもの歌の嗜好傾向および子どもたちを取り巻く音楽環境の変化を探るために質問紙調査を実施し、分析を試みる。子どもの歌唱行動に変化が

あるとすれば、それらは時代背景に伴うものなのか、あるいは他の要件も関連しているのか、これらの相関関係を明確にしなければならない。

これらを踏まえ、まず子どもの歌唱行動がどのような要因と関係するのか、家庭における音楽環境との相関関係を探る。そのうえで子どもたちが嗜好する歌の動向を把握し、最終的には子どもの歌の嗜好の変化および今後の方向性について考えることを目指す。

### 2. 方 法

2.1 調査時期 平成15年6月

2.2 調査対象 鳥取県倉吉市にある二つの私立幼稚園児137名の園児および保護者である。幼稚園児の内訳は男児72名、女児64名(1名不明)であり、年齢別では3歳児29名、4歳児53名、5歳児41名、6歳児14名である。

2.3 質問紙構成 本研究の分析に用いた質問項目は次のとおりである。

- 1) 歌を聴くことが好きか
- 2) 歌をうたうことが好きか

- 3) 家庭でよく歌をうたうか
- 4) 歌をうたう場合、誰とうたうか
- 5) 歌のレパートリーは何曲か
- 6) 現在、どのような歌をうたっているか
- 7) どのような時(状況)によくうたうか
- 8) いつ頃から歌を頻繁にうたうようになったか
- 9) 現在、何かおけいごごとをしているか
- 10) 保護者はよく音楽を聴くか
- 11) 保護者は幼児の頃、何か楽器を習ったか
- 12) 保護者がよく聴く音楽のジャンルは何か
- 13) 子どもに意識して音楽を聴かせるか
- 14) 子どもによく歌をうたうか
- 15) 楽器を演奏する家族がいるか
- 16) 家に楽器があるか
- 17) 子どもにうたわせたい歌

項目1)から9)に関しては、子どもを対象とした項目であり、項目10)から17)までは、保護者を対象とした項目である。なお、項目1)から3)、および項目10)、13)と14)は5段階評定尺度を用いて回答を得た。その他の項目は自由記述である。

2.4 手続き 質問紙の配布および回収は、それぞれの幼稚園のクラス担任に依頼した。なお、回答は幼稚園児の保護者による。

### 3. 結 果

#### 3.1 質問紙項目別集計

質問項目1), 2), 3)において検定結果では、年齢間の有意差はなかった。しかしながら、各項目の平均値の推移は図1が示すとおりである。それぞれの項目では、歌を聴くことと、うたうことが好きという行動に関しては4歳が著しく活発であり、5歳で下降するものの6歳で上昇している。ところが家でよくうたうという行為は3歳を最高に年齢の上昇とともに下降している。

子どもが歌をうたう場合、誰とあるいは何と一緒にうたうかという項目においては図2が示すとおりである(複数回答可)。

歌のレパートリーは、年齢の上昇にともなって増加する傾向が見られる。特に、4歳児後半より急激に増加していることに注目することができる。この結果を年齢別に図3-6で示す。この内容は、3歳では一般的な子どもの歌が多く、4歳頃以降では嗜好する歌がアニメソングに集中し、5歳および6歳においても同様の結果が得られた。また、一般的な子どもの歌は年齢の上昇とともにうたわれなくなっている。この結果は図7で示す。

どのようなとき(状況)にうたうかという項目で

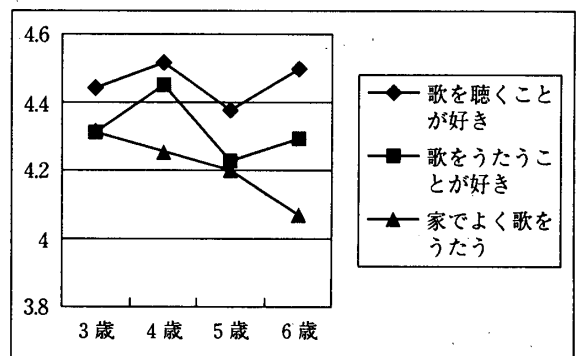


図1

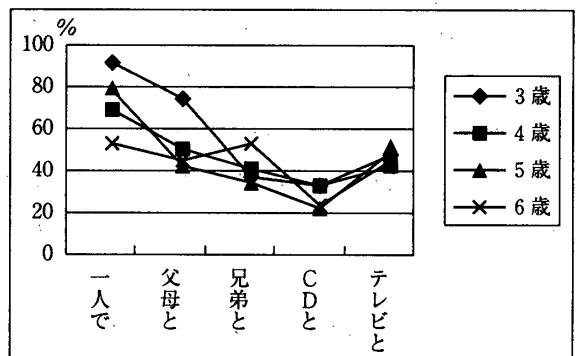


図2

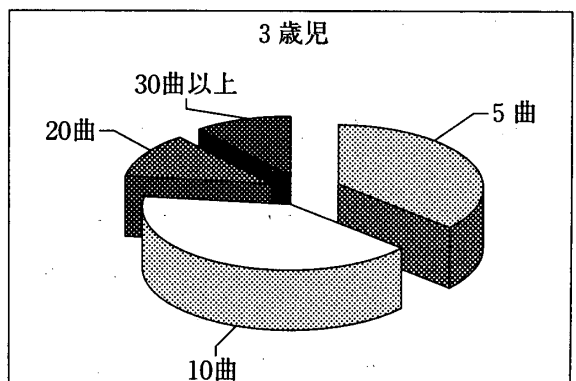


図3

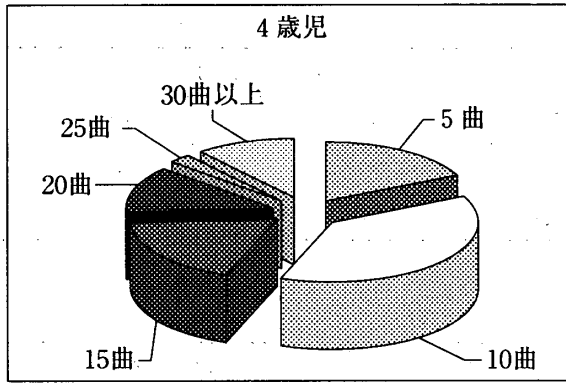


図4

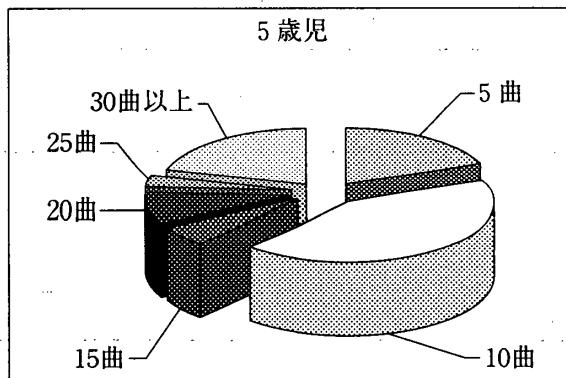


図5

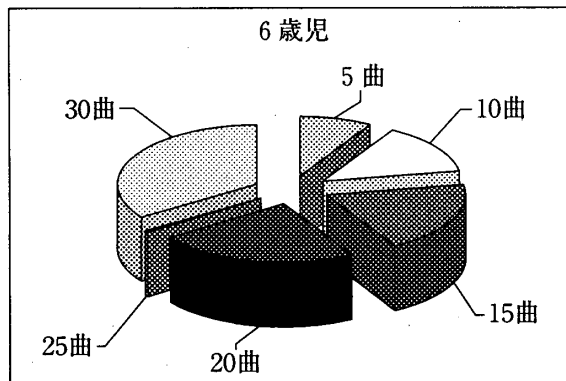


図6

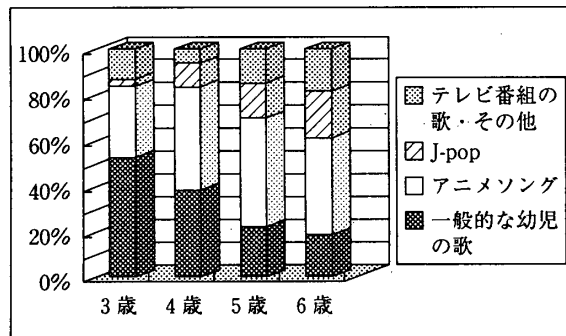


図7

は、車の中が圧倒的に多く、続いて入浴時、テレビを見ながら、遊んでいる時、機嫌のよい時などの結果が得られた。

いつ頃から歌を頻繁にうたうようになったかという項目では、最も早い年齢で1歳、最も遅い年齢では4歳6ヶ月という結果であった。年齢別では、3歳が最も多く54名、2歳も48名と多い結果であった。

一方、保護者が子どもたちに音楽をよく聴かせるという回答の平均値は3.29、子どもに歌をうたってあげるとい平均値は3.64であった。子どもの年齢別による平均値は図8で示すとおりである。なお、保護者が子どもにどのような音楽を聴かせるかという質問では、137名中55名が童謡を聴かせると回答し、Jポップスやアニメソングも若干の回答が見られた。この結果は図9で示す。

図8で示されるように、子どもに音楽を聴かせたり、うたをうたってあげるとい保護者の音楽的行為は年齢の低い3歳に顕著に見られる。特に歌をうたってあげる行為は6歳で上昇し、3歳児の平均値より上回っていることが注目できる。

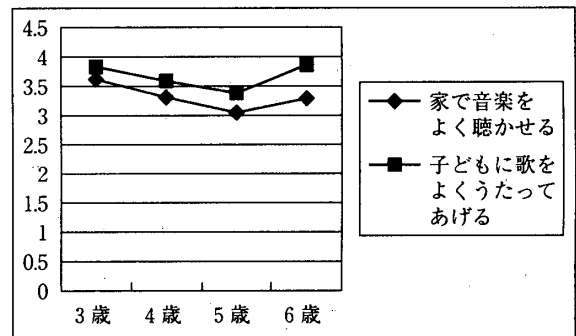


図8

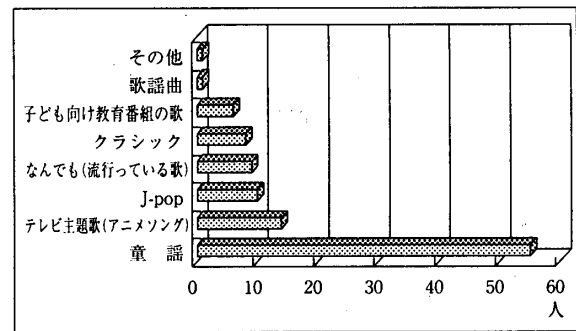


図9

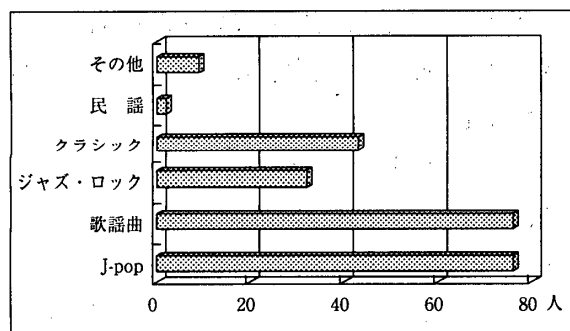


図10

また、保育者がよく聴く音楽のジャンルは、137名中76名が歌謡曲、同様に76名がJポップスであった（複数回答可）。この結果は図10で示す。

### 3.2 項目の相関関係

質問項目ごとの相関関係は次のとおりである。

歌を聴くことが好きであることと、うたうことが好きであるという行動には正の強い相関関係が見られた ( $r = .75$ )。同様に歌を聴くことが好きであることと、家でよくうたうという活動にしても正の強い相関関係が見られ ( $r = .60$ )、うたうことが好きであることと、家でよくうたう活動にもやはり正の強い相関関係が見られた ( $r = .79$ )。

そして、家庭における音楽環境と子どものうたう音楽活動との相関性は次のとおりであった。

#### 1) 保護者が子どもに音楽を聴かせる

子どもが歌を聴くことが好きであることとやや相関が見られるが ( $r = .25$ )、子どもがうたうことが好きであったり、家でよくうたうことには有意な結果は得られなかった ( $r = .07$ ,  $r = .14$ )。

#### 2) 保護者が子どもに歌を歌ってあげる

子どもが歌を聴くことが好きであること、歌をうたうことが好きであること、家でよく歌をうたうことにはそれぞれ有意な連関が見られた ( $r = .40$ ,  $r = .35$ ,  $r = .38$ )

#### 3) 楽器を演奏する家族がいるかどうか

t検定の結果、歌を聴くことが好き ( $t(126) = 1.72$ ,  $p < .10$ )にはやや有意傾向があるものの、歌をうたうことが好き ( $t(132) = .29$ ,  $p > .10$ )、

表1 歌を聴くことが好き

	おけいこをしている	おけいこをしていない
N	48	82
$\bar{X}$	4.45	4.45
SD	.51	.50

表2 うたうことが好き

	おけいこをしている	おけいこをしていない
N	50	86
$\bar{X}$	4.4	4.33
SD	.531	.669

表3 家でよくうたう

	おけいこをしている	おけいこをしていない
N	50	86
$\bar{X}$	4.3	4.2
SD	.86	.71

家でよくうたう ( $t(132) = .34$ ,  $p > .10$ )には有意差は見られなかった。

#### 4) 家に楽器があるかないか

t検定の結果、歌を聴くことが好き ( $t(127) = .32$ ,  $p > .10$ )、うたうことが好き ( $t(133) = 1.17$ ,  $p > .10$ )、家でよくうたう ( $t(133) = 1.31$ ,  $p > .10$ )のいずれも有意差は見られなかった。

#### 5) 子どもがおけいこごとをしているか

t検定の結果、子どもが歌を聴くことが好き ( $t(128) = .05$ ,  $p > .10$ )、うたうことが好き ( $t(134) = .53$ ,  $p > .10$ )、家でよくうたう ( $t(134) = .45$ ,  $p > .10$ )のいずれも二つの条件に有意差は見られなかった。この結果を表1から表3で示す。

## 4. 考察及び論議

本研究の目的は子どもを取り巻く音楽環境と、子どもが嗜好する歌との関連および今後の子どもの歌の方向性を探ることである。最初に子どものうたう行動と家庭における音楽環境の要因との関連につい

て、質問紙調査の分析による考察を試みた。

まず、図1の結果では、子どもたちがうたう音楽的活動を活発に行っていることが確認できる。そして、歌を聴いたり、歌をうたうことが好きであること、家でよくうたったりすることにはそれぞれ強い相関性があることも明らかであった。

4歳で歌を聴くこと、歌をうたうことが好きである音楽活動が活発に見られることは、やはり音楽学習経験によって導かれた結果であると考えられる。そのため、今回の分析結果においては、4歳という年齢は、上述した音楽学習経験、レパートリーの増加、後述するアニメソングが嗜好対象となることから子どもの音楽活動にとって急激な発達をとげる年齢であると示唆することができる。

次に、4歳で子どもたちの嗜好傾向がアニメソングであった結果に着目しなければならない。子どもたちが現在どのような歌をうたっているかという質問に対して、3歳ではわずかにアニメソングが見られるものの、そのほとんどが「こいのほり」「かたつむり」「チューリップ」「ぞうさん」などの子どもの歌である。ところが、4歳になると一転してアニメソングに変化し、3歳でうたわれていた子どもの歌は見られなくなってしまうのである。つまり、4歳では急激にアニメソング<sup>21)</sup>に集中し、同時にこれらのアニメソングで占められるようになるのである。この傾向は5歳および6歳も同様であり、アニメソングやテレビの子ども番組でうたわれる歌が子どもの嗜好対象となるのである。

それでは、4歳児以降、従来の「チューリップ」や「こいのほり」などの子どもの歌から途端にアニメソングへと子どもたちの嗜好が変化する要因は何か。

その一つに言語の発達が考えられる。言語が発達することにより、ストーリー性のあるアニメーションへ子どもたちの興味および関心が惹きつけられるのではなからうか。内容を理解することが可能となり、アニメーションの登場人物になりきり、イメージを伴いながらアニメソングに子どもたちの嗜好が

表れたものと考えられる。

3歳児を中心にうたわれる従来の子どもの歌の内容は、時代的にも現代の子どもたちとかけはなれていることが多く、主人公不在で一般的な風景がおもにうたわれている。一方のアニメソングは、番組の主人公が登場し、歌詞の内容も子どもたちの生活そのものが表現されている。そして、何よりも具体的なストーリーの展開がある。3歳児においても若干のアニメソングが嗜好されているが、この年齢においては歌の嗜好というよりもむしろ登場人物になりきることによって子どもたちの動きなどを引き出している。

ところが、言語の発達によりストーリーの展開が理解できるようになる4歳では、うたう活動がより可能になってくるのである。したがって、音楽学習経験と、言語の発達の二つの要因によって、アニメソングが4歳児以降の歌の嗜好対象となったものと考察できる。加えて、子どもたちのマスコミ音楽との接触が、子どもたちの歌への興味、関心を引き起こし、嗜好する歌となったことは明確である。

さて、5歳で歌を聴くことが好きであったり、うたうことが好きであること、および家でよく歌をうたったりする活動が下降していた要因は何か。また、歌を聴いたり、うたうことが好きである行為は6歳で再び上昇している要因は何か。

まず考えられるのがおけいごととの関係である。年齢の上昇とともにおけいごとをしている子どもの率は高くなっている。今回の調査では、3歳児が28%、4歳児が34%、5歳児が37%、6歳児が50%であった。なお、5歳児の下降傾向は図8の結果と一致しており、やはりおけいごとなどによる子どもの活動範囲が拡大していくことが原因であると考えられる。

家でよくうたうという項目で6歳児がさらに下降している要因では、うたうという活動よりも運動的な活動が多くなることが考えられる。また、羞恥心なども関わってくることも判断できる。反面、歌を聴くこと、うたうことが好きであるという項目では

6歳児で再び上昇している。特に歌を聴くことに関しては何歳の年齢よりも平均値が高い。この傾向は、図8で示されるように保護者の対応とも一致している。この要因として、大人志向の歌を嗜好するようになり、そのための理解力も備わってきたものと考えられる。そして、大人の模倣をしようとする年齢でもある。その例として、「おおきな古時計」<sup>22)</sup>「世界に一つだけの花」<sup>23)</sup>などが嗜好対象として多く見られた。詩を理解するのではなく、感情がともなってメロディに惹かれたことも考えられる。また、子どもが一番多くうたう状況であった車の中で保護者とともに聴いた曲とも推測できる。

さらに、子どもたちのうたう行為と家庭における環境的な要因の相関分析を試みる。

保護者が歌を子どもにうたってあげることと、子どもが歌を聴いたり、うたったりすることが好きであること、家でよくうたうことはそれぞれ有意な連関がみられたように、家庭における音楽環境が子どもの歌に影響する可能性が強いことが示唆できる。しかもこれらのこの要因は図8で示されるように年齢が低くなればなるほど関係が強い。

保護者が音楽を聴かせる要因では、子どもが歌を聴くことが好きであることにやや相関が見られるものの、子どもが歌をうたうことが好きであること、家でよくうたうことには有意な連関がなかった結果については、保護者が子どもたちに聴かせる音楽として137名中、55名が童謡を選んだことに起因しているのではないかと、つまり、前述したように子どもの嗜好がアニメソングへ傾倒している現状に対して、子どもたちに聴かせる歌が童謡であったことがこのような相関関係を示す結果になったものと推測できる。すなわち、アニメソングが子どもたちに及ぼす影響力の強さを示唆する結果であろう。

また、家でよく音楽を聴かせたり、歌をうたってあげる行為も図8では4歳、5歳ともに下降を示している。そして、6歳で上昇しているのは、図1と同様に子どもたちが歌を聴いたり、歌をうたうことが好きであるという行為においても同じ結果となっ

ているように、保護者の子どもへの音楽環境は子どものうたう活動と深く関わっていることが確認できる。

そこで問題となるのは、保護者が聴く音楽のジャンルは圧倒的に歌謡曲およびJポップスが多いということである。そのために子どもたちの歌の嗜好にも影響を及ぼす可能性は強い。なぜなら、今回、子どもたちがうたっている歌の1曲に前述の「世界に一つだけの花」が多数見られた。この曲は、同時に保護者が子どもたちにうたってほしい歌の代表曲でもあった。アニメソングの他に子どもを対象として作られた歌以外の歌でもすでに子どもたちに受け入れられているのが現状である。

このような結果を総合的に考察すると、子どもの歌の嗜好傾向は、4歳児以降、アニメソングへ集中しており、これらアニメソングは子どもたちの音楽活動に大きく関わっている。少子化などの社会的状況からも子どもたちとマスコミ音楽との接触はますます強くなることも予想され、このような現状は今後も継続していくことは確かである。

## 5. 今後の課題

そこで議論していかなければならないことは、前述した1990年代に生まれた新しいリズムパターンとの関連である。今回、子どもたちが嗜好するアニメソングでは複雑なリズムや速いテンポのものは予想に反してほとんど見られなかったものの、子どもたちの嗜好の対象であった「世界に一つだけの花」を例にあげると村尾<sup>1)</sup>の分析のとおり弱化モーラによる配字シンコペーションによるリズムが頻繁に見られる。このリズムパターンが子どもたちにすでに受け入れられているのが現実である。加えて、保護者たちの嗜好対象であるリズムパターンでもあり、すでに子どもたちを取り囲む音楽環境となっていることを強調したい。

今後も子どもの歌にもこのような新しいリズムパターンが増えていくことが予想される。また、今回

のアニメソングには多くのアウトタクトの曲が見られた。そのため、子どもたちの歌はますますのりがよいリズムとなり、本能的に子どもたちに受け入れられるであろう。

その反面、アニメソングやこれらの新しいリズムパターンによる問題点も生じることが予想される。新しいリズムパターンによる日本語の問題をはじめ、嗜好対象であるアニメソングの歌詞には、かたかなで表されている内容も目立っており、子どもの歌が変化していく一方で今後の課題となると思われる。

また、これらのアニメソングの音域分布の問題も残された。小川らの先行研究<sup>2)</sup>では、子どもの声域は、歌唱の学習経験によって4歳から6歳の間に急激に拡大している。子どもたちの嗜好対象であるアニメソングとこれら声域においてギャップはあるのか、今後の研究課題である。

家庭における音楽環境と子どものうたう音楽活動の関係では、保護者が子どもに歌をうたってあげるといふ項目に有意な連関が見られたように、子どもとのコミュニケーションの重要性が窺える。本研究では、子どもの嗜好する歌がマスコミ音楽との接触によって変化しつつある傾向を示唆し、今後、子どもの歌を研究するうえでアニメソングとの関わりを

無視することができないことを見出した。しかしながら、一方では子どもと保護者あるいは保育者とのコミュニケーションは子どもの歌う活動にとって基本であることは述べるまでもない。

今後の課題として、リズムおよび声域以外の要因においても子どもの嗜好傾向を分析しながら、その動向を把握していく必要があると考える。

#### 引用文献

- 1) 村尾忠廣・疇地希美「90年代おじさんの歌えない若者の歌～その2～弱化モーラによる配字シンコーションとおじさんの音楽情報処理」『音楽情報科学26-5』1998年 pp. 31-38
- 2) 小川容子他「幼児・児童の歌唱教材における音域分布の調査研究—子どもの声域とその比較を通して—」『音楽知覚認知研究第1巻』1995年 pp. 53-60

#### 註

- 註1) 「とっとこハム太郎」「おジャ魔女どれみ」「忍たま乱太郎」「ポケットモンスター」「アンパンマン」「アバレンジャー」など
- 註2) ワーク作曲 保富康平作詞
- 註3) 作詞・作曲 槇原敬之